

たことである(第4・8図参照)。この地点からは、壺形土器<sup>1)</sup>や鉢形土器が埋められた土器埋納遺構が11基検出された<sup>2)</sup>。これらの埋納土器には型式差があり、決して全てが同時期に埋められたのではなく、数時期にわたって埋められたものであることが明らかとなった。また、研ぎ直された磨製石斧が多数埋められた石斧埋納遺構は、6基中4基がこの地点から検出された(第9・10図参照)。

このうち土器埋納遺構が検出された地点は、馬の背状に広がるテラ地を形成する、ほぼ標高262.0mから262.3mまでの範囲内に限られていた。さらに、埋納されていた土器は、口縁部を北から南東までという限定された向きに向けて埋められていた。このように土器埋納遺構には数型式の時間を経てもなお、埋納を行う場所や方向性に一定の規範が守られている状況がみえる。

また、立位状態の壺形土器が対に並んで埋納されていた土坑の形態は、上面では1つの坑であったが、下位では坑が2つに分かれていた(第5図参照)。これらの壺形土器はそのままで自立しないので、坑の中で土器を立ておくための工夫が為されたと考える。このことから土器を何度も出し入れするために納めておく土坑である、と土器埋納遺構の性格が解釈できる。

### (3) 環状出土区域での遺構・遺物発見状況

さて遺物出土希薄域のすぐ外側では、遺物が多量に出土する区域が環状に広がる(以下、環状出土区域と略する。)ことが判明した(第12図参照)。この環状出土区域は、外径が約240m、内径が約150mにも達する広範囲な区域であった。さらにこの環状出土区域からは、住居跡が検出されなかったものの、破砕あるいは赤化した礫が散乱した状態で多数出土し、また252基という数多くの集石遺構が検出され、そして一般遺物の他に「第2の道具」といわれる土偶や耳栓などが出土した。これらのことから、環状出土区域は生活区域として用いられたと解釈した。

しかし報告書刊行に向けて、土器型式の細分を通して時期毎の様相を明らかにしていくうち、この解釈とは全く異なる「場の機能」をもった遺跡像が浮かび上がった。

### (4) 環状出土区域の分析

筆者は、第10地点での分析を基に南九州の縄文時代早期後葉前半期の土器型式を4期6群期に大別し、さらに深鉢形土器では18タイプに細別した<sup>3)</sup>。ここではこの大別に従い、第10地点の土器出土状況と土器埋納遺構などとの関係を検討する。

#### 【第1期第1群期】(第13図参照)

この時期、土器埋納遺構は検出されていないが、早期中葉期にはみられなかった(第20～23図参照)環状出土区域の形成がみられ始める時期である。R-9・10区でも土器出土量が減少する区域があり、その両側を挟んで接合する土器が多い。なお、深鉢形土器と壺形土器とは出土状況にほとんど差がみられない。

#### 【第1期第2群期】(第14図参照)

この時期、土器は直径約180m、幅約20mを測る環状区域(以後、第2環状区域と称する)を中心に出土した。特に数グリッド離れた地点で出土した土器片が数多く接合したことは注目できる。また遺物出土希薄域には、この期に属する土器埋納遺構がいずれも単体で5基検出された。土器埋納遺構では第2期第3群期と並んで主体をなす時期である。この期に属する土器埋納遺構は、遺物出土希薄域の南側に集中して検出された。

#### 【第2期第3群期】(第15図参照)

この時期、土器は直径約130m、幅約15mを測る環状区域(以後、第1環状区域とよぶ)を中心に出土した。特に注目できるのは、第1期第2群期よりも第2期第3群期が、第2期第3群期のうちでは深鉢形土器よりも一般出土の壺形土器が、環状出土区域を明瞭に形成することであった。また数グリッド離れた地点で出土した土器片が数多く接合する状況は、第1期第2群期と同様である。

さて第1環状区域の西側では、直線的に12m程の幅で土器出土量が減少する区域がある。この土器出土減少区域を挟んで両側から出土した土器は、接合関係にある資料が非常に多いことが特徴である。そして第1環状区域の外側では、土器出土量が激減し、土器出土域のはほぼ空白域となることも注目できる。

ところで遺物出土希薄域には、この時期に属する土器埋納遺構が3基4個体検出され、土器埋納の中では第1期第2群期と共に主体をなす時期である。第10地点の象徴的存在である対で並んで埋納された壺形土器は、この時期に属する土器である。この期に属する土器埋納遺構は、遺物出土希薄域の東端と西端とで検出された。

#### 【第2期第4群】(第16図参照)

この時期、土器は直径約130m、幅約20mを測る第1環状区域に集中し、遺物出土希薄域との境がさらに明瞭になる。また第2期第3群期の第1環状区域西側でみられた土器出土減少区は、さらに明瞭になる。そして数グリッド離れた地点で出土した土器片が接合する状況は、第1期第2群期や第2期第3群期と同様である。しかし、この時期に属する土器埋納遺構は1基1個体しか検出されず、第1期第2群期や第2期第3群期に比べ対照的である。

#### 【第3期第5群期】(第17図参照)

この時期、直径約65m、幅約10mを測る環状区域での土器出土が依然認められるが、第10地点東側では遺物出土希薄域と環状出土区域との差が不明瞭となる。また土器埋納遺構は検出されなかった。遺物出土希薄域は決まるが、希薄域が確認できる状況が続くことは注目できる。

#### 【第4期第6群期】(第18図参照)

この時期、土器が集中して出土する第1環状区域のうち東側(Q-12・13区)部分が他地点に移り、環状出土区域や遺物出土希薄域が消滅した時期である。